

# 「受験指導」と「双方向型の授業」の両立を目指して

インターネットアプリ「LINE」を活用した英作文指導

西山隆之（六甲中学・高等学校）

## 1. 職員室で教師に質問できない現状をどう変えるか

生徒は小さな「気づき」がきっかけで勉強が好きになる。少し緊張しながらも職員室に足を運んで先生に質問して得られた「気づき」は、その生徒のなかで学問と向き合うためのいい刺激になっているはずである。しかし大変残念なことに、私は教え子たちと職員室でゆっくりと腰を据えて話す機会があまり持てない。休み時間は次の授業のためにバタバタと準備をし、放課後は掃除監督、職員会議か、そうでない場合は下校時間までクラブ活動に出ているという日常は他の先生方と較べても特異なものではないが、なんとかしてあげたいという思いは以前から抱懐してはいた。そこでそういった機会を別な形で補う方法はないかと考えた結果、メールもしくはインターネット上のアプリケーションソフトの一種である「LINE」で生徒たちとやりとりをしようと思い立った。

実は、メーリングリストを作って生徒から質問を受け、回答を全員に流すというアイデアは、11年前に中学生を対象に始めたことがある。しかし対象年齢が低いことで生じたマナーの問題や、送受信の煩雑さなどから徐々に活動は鈍り、2年ほどで休止せざるを得なくなっていた。しかしここ数年、スマートフォンの普及に伴って高校生の間ではLINEがメールよりも主流になりつつあることや、メールに比べての圧倒的な即時性、グループ化の簡便さといった特長があることに着目したとき、「高学年対象なら、LINEを使って前と似たようなことが補完できるかもしれない」と考えた次第である。

提供開始からわずか数年のLINEは、若年層に対するその爆発的な普及に鑑みれば教師の認知度も低く、またその危うさへの指導も不徹底で、ましてや授業展開に活用している事例は聞いたことがない。しかし高校生への浸透ぶりを見るにつけ、これをうまく活用できれば授業活動の幅も広がり、他の先生方に対しても一つの事例を提供できるだろうと思い、委託研究のテーマとした次第である。

## 2. 準備に必要なこと

### (1) LINEに登録する

さて、LINEを使用するには、まずは自分がLINEに個人的に加入し、認証手続きを済ませなければならない。LINEはスマートフォン上だけでなく、PC上でも扱える。大量のデータを入力して添削指導を行うなら、PC上で操作すると便利である。

次に、生徒たちとつながる（LINE上の用語を使えば「友達になる」、という。）方法であるが、これは多岐にわたる手段が提供されており、ここでは個々の具体的な説明には言及しないが「招待」「QRコード」「ID検索」「電話帳自動収集」といった手段がある。生徒のID（個別に割り振られた識別番号）を探し当て（もしくは生徒に自分を探させ）、やりとり可能な状態にしておくのが大前提であるが、メールとは違い、これがまず大きなハードルとなる。

### (2) 生徒とグループを組む

LINEでつながる相手を増やしていく方法の一つに「電話帳自動収集機能」というものがある。お

互いの携帯電話に相手の電話番号が登録されている場合、自動的に LINE でつながる設定のことである。便利ではあるが、次のようなリスクも伴うことを知っておかなければならない。

現在、携帯電話の番号を変えた場合、それまで持っていた番号は、概ね 1 年以内に新規契約者に割り当てられる。携帯電話を購入した人が上記の機能を使った場合、以前その生徒の番号を使用していた他人の関係先などにも名前やプロフィール写真などの個人情報がその人に表示され、思わぬトラブルにつながる可能性もある。そういった問題を未然に防ぐ意図から、現在 LINE では 18 歳未満の ID 検索ができなくなっている。従って、教員が生徒とつながるためには、まずは 18 歳に達した生徒とつながり、その生徒を介して芋づる式に参加者を増やすという方法をとるとよい。生徒同士は校外で直接携帯電話を持ち寄る機会があるので容易につながることができるが、携帯電話を持ち込み禁止にしている学校では、教師が生徒とつながること自体にハードルがあるのは、教育媒体として LINE が成り立ちにくい最大の理由と言える。

### (3) 正しく運用する指導の機会にも

LINE やツイッターをはじめとする SNS (ソーシャル・ネットワーキング・サービス) が関係するトラブルは数多く報告されているため、私の勤務校でも、昨年夏に SNS の危険性を学ぶ研修会が開かれた。私自身、うかつな使い方はできないと学んだ一方で、多くの生徒にここまで浸透しているこの通信手段をただ「自粛しなさい」と指導して終わりにするよりも、グループを運用する中で不適切な言葉や画像に指導を加えてゆくことも、副次的なことではあるが意味があると思った。

## 3. 双方向型の英語教育に役立てる方法

高校 3 年次の授業は入試問題演習を多く取り入れる。進学校で入試問題を教材化すれば生徒の食いつきもよく、教える側は楽であるものの、次のような問題点をはらんでいる。

1. 単調な授業展開によって伸ばす言語領域が偏り、逆説的だが入試対応力も伸び悩む。
2. 語学力を下支えするのに欠かせない「音読」を徹底することができない。

LINE をとおして生徒たちに課題を投げかけ、投稿を参加生徒全員で検討しつつ英文を練り上げてゆくという「双方向型」の英語教授法は、生徒に英語で発信させるという普通の授業に対する補完的役割が期待できたので、以下に示した手法で実際に運用をスタートすることとした。英作文の授業において「黒板で問題を解いて見せ、答えを示し、終わり」という単調な授業展開から脱皮し、生徒の参加意識の底上げにもつながるような授業展開を試みるのが狙いである。

## 4. 具体的な手法

私が取り組んだ手順は以下の要領である。

### (1) 「英作文講座」の質問サイト設立

いったん芋づる式に生徒とつながれば、次は目的を持ったグループサイトを立ち上げる。私の場合、授業で呼びかけ、ひとまず約 40 名でのグループを組むことができた。

生徒はアカウント名に本名を用いないケースがほとんどであるが、これはセキュリティ上の理由でその方が望ましいと思う。しかし、同じ理由で教師はそれぞれアカウント名が誰なのか把握しておく方がよい。

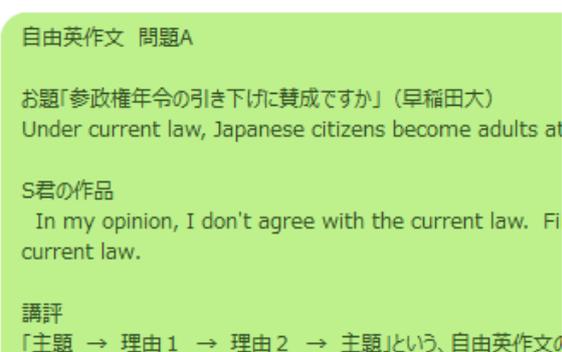
## (2) ルールを整備する

勝手に書き込みでサイトが混乱したり、生徒の学業がおろそかになったりしては主客転倒である。運用に当たっては、最初にルールをきちんと周知し、守らせていくことが重要である。私が実行したルールは、「個別のメッセージで質問を受け、解答が共有できそうなものはグループ全員で共有する。グループの掲示板には生徒は勝手に書き込みをせず、私だけが生徒の質問事項を取捨選択し、紹介する」というものである。つまり、生徒は私と個別にメッセージをやりとりし、全員の参考に供せられると私が判断したものだけを選び取り、全体の掲示板に載せる、というシステムである。こうすることで、生徒は質の高い投稿や、共有して役に立つ回答のみを受け取ることができると同時に、グループサイトで生徒同士のやりとりが暴走するというトラブルを未然に防ぐこともできた。



## (3) グループに属さない生徒への配慮

スマートフォンを持たない生徒、または保護者がLINEを使わせていない生徒への配慮も当然必要である。そこでPCのメールアドレスも公開し、そちらでも質問などを受け付けるようにした。また、私がLINEに投稿した本文は、PCのメールアドレスから質問してくる生徒に対しても送信した。



## (4) 勤務時間内に作業が完結する仕組み

私にゆだねられたこの委託研究事業は、自分の生徒だけにとどまらず、ひろく全国の私学に勤務される教職員の資質向上に役立つものでなくてはならない。私一人が無理をして教育効果を得ても、それが自己満足に終わっては研究事業としては不十分であると考えます。やはりこの方法は、少なくとも次のステップへのたたき台として他の先生方への参考になる形をとらなくてはならないと思う。そこで、次の

ようなルールを策定した。

1. 宿題に出た英作文を投稿する場合は、その教材を授業で扱う2日前を締め切りとする。
2. 概ね投稿の翌日に返事を書く。返事できない場合もあることを予め了解しておいてもらう。
3. 他の生徒たちの参考になる投稿があった場合は、翌々日以降の授業で紹介する。

こうすることで、教師は学校にいる間に作業を進めることができる。自宅に持ち帰ってやらなければ成り立たないような仕組みでは息が続かないので、応用が利きやすい形を模索していった結果、この方法に行き着いた次第である。したがって、夜中に生徒とリアルタイムで何往復もやりとりをする、というやり方は採っていない。

## 5. 生徒からのフィードバック

このシステムを運用し始めて1学期が過ぎた頃、生徒に次のようなアンケートを行った。



質問 1：メール添削は、君の勉強に役立っていますか。

成績上位の生徒ほど「役に立つ」を選んでいただようである。また、十分に練っていない作文を投稿した生徒に「もっと辞書を使っている調べなさい」とだけ返事したケースもあったが、そういう生徒は「役に立たない」を選んでいたのは残念であった。

このシステムの活用度は生徒のモチベーションによって大きく左右されるようである。

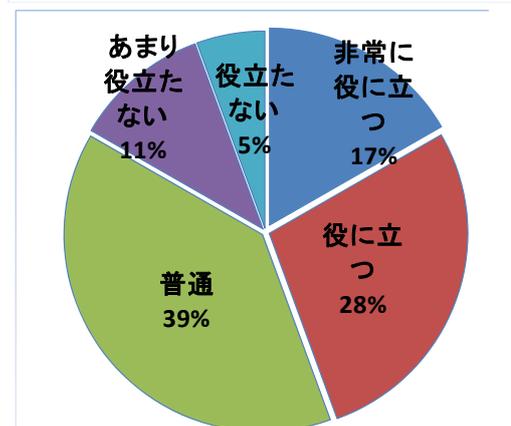
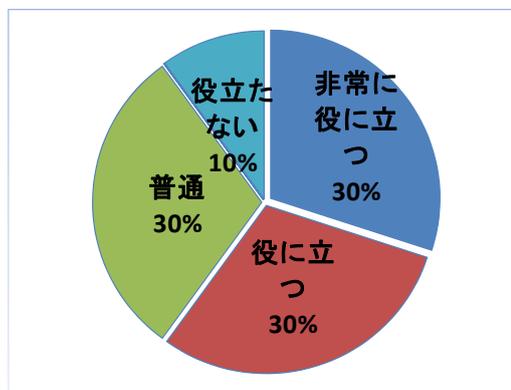
質問 2：グループに投稿された他の生徒に対する添削は役に立っていますか。

「個別のメッセージで質問を受け付け、解答が共有できそうなものはグループ全員で共有する」というシステムを運用する上でもっとも重要なのがこの項目である。生徒の学力には格差があるので、全員を満足させる回答を発信するのは難しい。

今後の課題は、英作文を「面白いものだな」と感じてもらえるような回答をどうやって作ってゆくかということにある。また、「あまり役立っていない」と感じている生徒たちがそう答えた理由として、

- ・スマートフォンがないので LINE を使いづらい
- ・テキストを打つのに時間がかかる
- ・受験のために LINE アプリを消した

等が上げられていた。PC だと立ち上げに時間がかかり手軽さがなく、またスマートフォンだと字が打ちにくい、というジレンマも浮き彫りになった。



## 6. 他の教員とともに

LINE の作文講座には、生徒ばかりでなく、本校の卒業生や、他の中学・高校・大学の先生方にもオブザーバーとして参加頂いた。英語教育のノウハウを多くの方々と共に共有し、生徒がより主体的な学習をすすめるようになり、とかく一方通行に陥りがちである受験指導が「双方向型の授業」へと転換するきっかけになればと将来を見据えている。

